

## 「タラントンのたとえ」 マタイによる福音書 25 章 14～29 節

聖学院大学 児童学科教授 小池茂子

今日は、有名なタラントンのたとえといわれる聖書の箇所を用いてお話をしたいと思います。聖書にはタラントンという言葉が出てまいります。1 タラントンは 6000 デナリ、1 デナリは当時の労働者が一日働いて得られる一日分の給料ですから、1 タラントンは週休 1 日としても労働者の約 19 年分の給料ということになります。

このたとえ話には 3 名の僕が出てきて、主人から商売をするための資金を与えられ、5 タラントン預かったものと 2 タラントン預かったものは商売をして成功し、主人からねぎらいの言葉をかけられます。しかし、1 タラントン預かったものは、その託された資金を用いて商売をせずその金を土の中に埋めて隠してしまいます。そして、全く手付かずの資金を主人に返却することで主人の怒りをかうというものであります。

さて、このたとえ話の中にあるメッセージは何でしょうか。主人から商売のための元手を託されたにもかかわらず怠けて儲けを稼ぎ出せなかった、僕の怠慢を問題にしているのでしょうか。そうではなくて、ここで聖書が問題にしているのは儲けをもたらさなかったという結果よりも、1 タラントンを預かった者がその主人に対して抱いていた思いそのものを問題としているのです。

聖書にはこうあります。「ご主人様、私はあなたがまかない所から刈り、散らさないところから集める酷な人であることを承知していました。そこで、恐ろしさのあまりあなたのタラントンを地の中に隠しておきました。」1 タラントンを託された僕は、主人に対して親しみよりもむしろ、恐れを抱いていたのです。主人から託された決して少なくない 1 タラントンというお金、この 1 タラントンは主人から信頼されたしるしであったはず。しかし、1 タラントンを託された僕は、主人から委託された金は彼にとってはチャンスというより、失敗して借金をこしらえたときのことを思い煩い、却ってこのことによって自分が縛られ、自分の自由を奪うものともなる厄介なものと考えたのです。そこで、彼は自分の過をとがめられることなく窮地に追い込まれることはないと考え、託された資金を土の中に埋めておいたのです。

この譬えでイエスは、当時の宗教的リーダーたちを「1 タラントンを託された僕」になぞらえたのだといわれています。即ち、神様から託されているものを人と社会に喜ばれる形で神様にお答えすることをせず、とにかく宗教的規範に抵触しない生活の形を守ることに終始する姿についてイエスは痛烈に批判されたのでした。

ここでみなさんに、私の小学校時代からの親友である N さんの話をしたいと思います。N さんと私とは小・中・高等学校と同じ学校で過ごし、小学校の頃から大の仲良しでした。彼女は高校卒業後 ICU(国際基督教大学)に進学し、卒業後も自分の能力を磨き外資系のコンサルタント会社のシニア・コンサルタントにまで上り詰め、絵にかいたようなキャリアウーマンとしてのキャリアを積み上げていられました。大学院は出たものの正規職がなく私が大学の非常勤講師をして生計を立てている頃、彼女はクライアントから1時間の仕事に対して3万円のペイを支払ってもらおうような仕事をしているキャリアウーマンでした。彼女から華やかな仕事の話が聞かされる度に、彼女はなんと自分とかけ離れた世界で活躍しているのかと驚き、彼女はなぜこうも利潤追求第一主義のアメリカ的な価値観で生きているのかと、やっかみも半分あって彼女の生き方を少し軽蔑するような感情も私は持っていました。元来の性格のよさ、明るさを持っている N さんと私の友情にヒビが入るようなことはありませんでした。

このように活躍していた彼女は40代に入って間もなく、脳出血で倒れ、右半身に麻痺を残し言葉の発語も不自由な状況に陥ったのでした。連絡を受け、彼女の病床を見舞ったとき、彼女のキャリアはこれですべて失われてしまうのだろうか…、という思いが私の脳裏をよぎったのを覚えています。それから13年の時が過ぎ、Nさんは、半身の麻痺と失語症という後遺症を抱えながらも、自分で小さな会社を立ち上げました。それは、歩行を助ける補助装具を足につけたまま、その上から履けるおしゃれなブーツをオーダーメイドで製作する会社を立ち上げたのです。

脳出血の後遺症を得た後の、彼女の絶望、リハビリ、そして回復への道のりを、私が軽々しく語ることは控えなければならないことだと思います。しかし、事実、彼女は障がいを得て、障がい者が社会に自信をもって出ていくためには、おしゃれやファッションは、その人に勇気を与えるアイテムとして非常に重要な意味を持つものであると確信したのでした。そして、人の手の助けを借りて生活を余儀なくされることの肩身の狭さに加え、障がい者が

身に着けるもの一つ一つが福祉のお世話になっている人たち使用の、(彼女の言葉を借りれば)「ダサくてカッコ悪いデザイン」しかないことに驚きと憤りを感じた彼女は、どんなに探しても装具をつけた自分の足を美しく覆ってくれるカッコよい靴がないのであれば、自分がそれを世の中に提供する作り手になろうと決断したというのです。クリスチャンである N さんは私に「かつてビジネスの世界で人よりも上にのし上がることを考え続けてきた人間であった自分が、病気になって変わった。病気を得て神様から与えてもらっている恵みがよく分かるようになった。」と語ったのです。

13 年という年月、闘病やリハビリに明け暮れる日々の中で、人に交わることを避け沈み込む日々もあったようですが、その中にあっても彼女は自分の人生に神さまが指し示そうとされているご意思について彼女は手放さずに考え続け、「ご主人様、私はあなたがまかない所から刈り、散らさないところから集める酷な人であることを承知していました。そこで、恐ろしさのあまりあなたのタラントンを地の中に隠しておきました。」との結論には至りませんでした。

その道筋を支えられたのは、家族やドクター、友人、多くの彼女を支えた人達でありましたが、彼女の魂を守り導いたのは、大いなる神ではないかと私は彼女を見てきて思わずにはいられないのです。クリスチャンである彼女は「絶対に神様は私を見捨てないと思う。自分にしかできないことがあると思う。」と彼女はよく私に語りました。そして、彼女の語るその言葉と姿は、私をも励ます力を持っているのです。

わたしたちは、身体の状態や、生まれ持った性向、また、どの国にどのような家族のもとに生まれどのような環境の中で今日までの生活を送ってきたかなど、所与の条件は一人ひとり異なります。一人ひとりが負っている、苦勞も異なるものがあるでしょう。その様な中で、神様なんかいるわけない。いたら、こんなに過酷な状況に私を追いやられるわけがないではないか…、と思われるかもしれません。しかし、神様は私たち一人ひとりのつぶやきやよわさ、恐れを知っていてくださる方であると聖書は語ります。そして、それを知った上で、それでも神様が私たちに与えてくださった「賜物・神から託された使命」があるということなのだと思えます。

私たちは、社会のなかに渦巻く、生活保守主義の風潮に押しつぶされて、神様に信頼するよりも「最低リスクの法則に従って」、神様からいただいた賜物を使わないまま「地面に

埋めてしまうような」生きかた、自己保身だけを考える生き方に埋もれてしまうのです。これでは、私たちの霊的、内面的な成長は望むべくもありません。

神様からいただいているよき賜物を生かす努力、それは、賜物を地面に埋めておくよりも大変な努力を要するものだと思いますし、それに目を向け、それを引き受けて生きていくことはある意味でとても苦しいことなのかもしれません。しかし、主人のことを「あなたがまかない所から刈り、散らさないところから集める酷な人であることを承知していました。」と考えてしまった、1 タラントンを託された僕のように「結果への不安」を先回りして考えて何もしないのではなく、神様がその道筋を支え「守ってくださるという神への信頼」をもって、自分に託された恵み・使命が何かを考えつつ、今日からまた新たな一歩を踏み出して行きたいと思うのです。みなさんにも、一人一人に託されたタラントがあるはずです。今日から、このことを考えて歩んで参りましょう。

祈りをささげます。

在天の父なる神さま。5月最後の日の大学礼拝を、ここに一同集められて守ることができました幸いを感謝いたします。4月に始まった学びも佳境に入る時期となりましたが、季節の変わり目にあって、中には疲れを覚えているものや、体調を崩しているものもおります。暑さに向かう時期にあって、どうかあなたが私たち一人一人の体と霊的な健やかさをお支え下さり、私どもの歩みをあなたの御心にかなうよう導いてください。この拙き感謝と願いを、主イエス・キリストの御名によって御前におささげいたします。 アーメン

2017年5月31日 聖学院大学 全学礼拝